

ホーフマンスタールのユダヤ性

井 上 修 一

(1)

よく知られているように、ホーフマンスタール（1874-1929）には少なくとも八分の一ユダヤ人の血が流れていた。曾祖父の豪商イザーク・レーヴ・ホーフマンがユダヤ人であったからである。曾祖母もユダヤ人であったと仮定すると、これは四分の一になる。四分の一としている論文もあるが、この点はいまひとつはっきりしない。

成功したユダヤ人一族によくあるようにホーフマンスタールの祖父はキリスト教徒と結婚し、カトリックに改宗している。両親も、ともにカトリックであった。したがってホーフマンスタール自身にはユダヤ人社会との関係もなく、自分のユダヤ性に対する意識が薄かったと言われている。作品や既刊の書簡類を見ても、この見方を覆すようなものは出て来ない。ユダヤ百科事典「ユダイカ」にもホーフマンスタールは掲載されていない。

それどころか、反ユダヤ主義に近い言辞を弄していた疑いがある。ホーフマンスタールの一族はウィーンではもっとも成功した典型的な大ブルジョワジーである。曾祖父は1792年、プラハから商会 Konigswald の支店管理人としてウィーンに移り住み、絹織物業などで大きな成功を収めた。その功績を認められて1835年、ときの皇帝フェルディナント一世から世襲の領地貴族に取りたてられたのである。叙爵によって一族の姓はホーフマンから「フォン・ホーフマンスタール」に変わった。この繁栄と名誉は事業を継いだ祖父の代にも、銀行家になった父の代にも続いていたので、一族の中には貧しい東方ユダヤ人などを蔑視する雰囲気も生れていたのではないかと思われる。

ホーフマンスタールが1896年5月、東ガルスシアのトルマツ（Tlumacz）で

兵役訓練を受けたとき、ユダヤ人民家に宿営した。このとき父親は息子に手紙を送って、「ユダヤ人に飲まれるのはもったいないからワインの瓶に栓をしておくように」¹ 忠告している。

ホーフマンスタール自身も友人オスカー・ヴァルツェル夫人の容貌をけなして「猿みたいなベルリンのユダヤ女」² と言ったり、シュニッツラーの戯曲「淋しい道」で使われている台詞を批判して、「ウィーンのユダヤ人の喋り方そっくり」³ と言ったりで、度々「ユダヤ人」という言葉を否定的な意味に使っている。多くが貧しく教養がなかったユダヤ人を見下していた気味がある。

当時「ユダヤ人」という言葉を侮蔑語として使うのは一般的だったから、ホーフマンスタールの言った片言隻句に特殊な意味を付与するのは不適當かもしれない。しかし、もしホーフマンスタールにユダヤ人としての意識が強かったら、たとえ何気なしにでもこうした言葉は口にできなかったのではないかと思う。ちなみに「富裕で知識エリート」というユダヤ人像があるが、それは同化ユダヤ人のごく一部に当てはまることであって、当時のウィーンでは大多数のユダヤ人は貧しく、社会の底辺を形成していた。

ヘルマン・ブロッホ、リヒャルト・アレヴィンをはじめとするホーフマンスタール研究者の多くもこれまで、ホーフマンスタールのユダヤ性の問題に真剣に取り組んで来なかった。ホーフマンスタールが何も書き残していないので取り組み難かったこともある。ホーフマンスタール研究の中心である“Hofmannsthal-Blätter”誌の創刊以来の目次を眺めてみても、このテーマの研究はほとんどない。⁴

(2)

しかしホーフマンスタールが何も書き残さなかったからと言って、それがそのまま何も考えていなかったことになるとは限らない。

ユダヤ問題は単にユダヤ人と非ユダヤ人の問題ではない。ユダヤ教徒と同化ユダヤ人の問題、西方ユダヤ人と東方ユダヤ人の問題、シオニズム問題など、ユダヤ人同士の間複雑微妙な問題も絡まっていて、とても一筋縄では行かないのである。したがって自らのユダヤ性に思いを馳せることがあっても、影響の大きさや保身を考えて発言を控えた人も多いに違いない。

たとえばカール・クラウス（1874-1936）である。クラウスは道徳のご意見番として、ウィーン社会のあらゆる悪、政治の腐敗、文化の墮落、倫理の崩壊

に立ち向かい、齒に衣着せぬ批判を加え続けた正義漢である。もちろん世にはびこる反ユダヤ主義にも挑戦した。しかしながら自らのユダヤ人問題には口をつぐみ、受けた不快にも咬みつかなかったのである。ニーケ・ヴァーグナーがカール・クラウスのユダヤ性を論じた折、そのタイトルを“Cogito ergo sum”をもじって“Incognito ergo sum (秘匿するゆえ存在す)”⁵と付けた。このタイトルがホーフマンスタールにも当てはまることは大いにあり得るのである。

ホーフマンスタールが生きた時代はちょうどウィーンで反ユダヤ主義がはびこっていた時と重なる。それを象徴するかのように、1895年、ウィーン市長に反ユダヤ・反マジャールを選挙スローガンにするカール・ルエーガー（1844-1910）が選出された。ウィーン工科大学の守衛の子として生まれたルエーガーは、下層中産階級の生活の苦しみと怨念を熟知していた。そこで19世紀後半の工業化、都市化に取り残された人々を選挙基盤に1893年新党「キリスト教社会党」を立ち上げ、かれらの貧窮化の原因を流入する外国人に転嫁して票を集めたのである。

しかしユダヤ人排斥というスローガンが過激すぎるので、温厚篤実かつ宗教的寛容で知られる皇帝フランツ・ヨーゼフはルエーガーの市長への認証を拒否した。これはウィーン市政の歴史に残る大きな事件であった。選挙は四度やり直されたが、四度ともルエーガーが選出された。そこで皇帝も止むなく1897年にルエーガーを市長として認証せざるを得なかった。以後、ルエーガーは1910年に亡くなるまでウィーン市長の職に留まり、ウィーンに反ユダヤ主義が跋扈する一因を作ることになる。当時の反ユダヤ主義がいかに根強くまた理不尽なものであったかは、カール・クラウス、アルトゥル・シュニッツラーをはじめとする多くのユダヤ系文学者が証言するところである。

上部オーストリア州に生まれ育ったアドルフ・ヒットラー（1889-1945）はルエーガー市政の1908年から1913年までウィーンに住んでいた。画家になりたくてウィーン造形美術大学（Akademie der bildenden Künste）の入試を二度受けるがいずれもうまくいかず、ウィーン時代は挫折と失意の中にあった。ルエーガーのユダヤ人排斥のスローガンはこの屈折した若者の心をも捉えたと言われている。ヒットラーの反ユダヤ主義思想、大衆の不満に迎合して人心を掌握する選挙戦略、演説の巧みさなどは、いずれもルエーガーから学んだものだと言われている研究者もいる。⁶

ホーフマンスタールが活躍していた頃のウィーンはこういう状況だったのである。ルエーガーが市長に選出された1895年から亡くなる1910年までの期間は、

ホーフマンスタールの二十一歳から三十六歳の時期に当たる。この間ホーフマンスタールは本当に、八分の一とはいえ自分の体の中に流れるユダヤ人の血のことを考えたことがなかっただろうか。シュニッツラーは自伝の中で当時「有名になったユダヤ人がユダヤ人であることを考えないでいることは不可能だった」⁷と、述懐している。

当時の人々の多くはホーフマンスタールのことをユダヤ人だと思っていたという指摘もある。⁸ たとえばホーフマンスタールの友人レオポルト・フォン・アンドリアンはホーフマンスタールの喋り方を日記の中に「ウィーン訛をひけらかし、同化ユダヤ人であることを意識的にカモフラージュしている」⁹と書いている。

(3)

ホーフマンスタールが自らのユダヤ性を意識していなかったと言う定説に早くから疑問を持っていた研究者がいる。プラハ生まれのユダヤ人文芸評論家ヴィリ・ハース(1891-1973)である。ハースはカフカの友人でもあって、カフカの「ミレナへの手紙」の編者であり、またベルリンの文芸誌「文学世界(Die literarische Welt)」の創刊者として知られている。ホーフマンスタールとの間には頻繁ではないが十七年間にわたる往復書簡もある。

かなり以前のことだが、ハースはグスターフ・クロヤンカー(Gustav Krojanker)が編んだ「ドイツ文学のユダヤ人(Juden in der deutschen Literatur)」(1922)の中で、ホーフマンスタール文学の中に目に見えない形で潜んでいるユダヤ性の問題を取り上げた。ユダヤ性は初期の韻文劇「昨日」から後期の戯曲「気むずかしい男」に至るまで一貫して潜んでおり、いわゆるホーフマンスタールの自我の危機(die Krise des Subjektes)なるものもユダヤ性と関係が深いという。¹⁰ これはおそらくホーフマンスタールとユダヤ性とを結びつけた最初の、そしてほとんど唯一の説得力ある論文ではないかと思う。

ハースによればホーフマンスタールは自分のユダヤ性について直接的な形では何も語らなかったが、作品の中にはさまざまな粉飾を施して散りばめてあるという。たとえば、エッセイ「道と出会い(Die Wege und die Begegnungen)」(1907)¹¹ がその一つである。これは燕が毎年同じところに戻ってくることを不思議に思う男の話である。この男は、人間が自分の判断で行っているつもりの人生におけるさまざまな旅や出会いも、渡り鳥の往還のように、本当はなに

か目に見えぬものにとぐり寄せられているのではないかと考えている。そしてそれは一種の運命の力とかエロスの誘引力のようなもので、時空を超えて星辰の運行すら規定しているものだと考える。

語り手がこのような考え方をするようになったのは、自分がかつて旅行案内書の余白にフランス語で走り書きしたアグルなる男の言葉、「ヤケの子アグルの語ったことを思い出す。アグルはこの世でいちばん不思議なものは、空に残る鳥の翔び跡と処女に宿る男の痕跡であるという」¹²を目にしてからである。以来、この男はこうした不思議を感じずヤケの子アグルと自分の心がどこかで繋がっているという思いを払拭することができない。ただ、このアグルなる人物の言葉がどこに載っていたのか、またアグルがいったい何者だったのかが、どうしても思い出せない。そこで自分の過去の体験に分け入って探索を続け、結局、かつて夢で見た放浪の民の長ではないかと思うようになる、という話である。

ところがハースによると、ヤケはもとよりこのアグルなる人物もアグルの言葉も、さらにまた作中アグルと比較される、貧しい人々が落ち穂を拾うのを黙認したボアスも、ユダヤ教の原典である旧約聖書の中に出てくるといふ。旧約聖書の「箴言」の第30章にある「ヤケの子、アグルのことばなる箴言」の第18節および第19節の「わが奇とするもの三つあり 否な四つあり共にわが識ざる者なり 即ち空にとぶ鷺の路 磐の上にはふ蛇の路 海にはしる舟の路 男の女にあふの路これなり」の件のことである。これだけ重なってればハースの指摘する通り、ホーフマンスタールが旧約聖書を下敷きにしたことは疑う余地がない。

ではなぜホーフマンスタールはわざわざ出典を秘匿し、どうしても思い出せないなどという手の込んだ粉飾を施し、読者を煙に巻いたのであろうか。すでに述べたようにアグルの言葉自体はフランス語に変えておく念の入れようだ。もちろん旧約のアグルの言葉を読んで道と出会いの不思議さに思い至り、不可思議な雰囲気を一層醸し出すために出所を秘しただけかもしれない。しかし、ハースは別な読み方の可能性を示唆している。

ハースはヤケも、アグルも、ボアスもさらには不可思議の箴言も、旧約聖書をきちんと読んでいる敬虔なユダヤ教徒に対しては、出所を秘したことはないという。この主張が正しいとすると、ホーフマンスタールはユダヤ教徒が出典に気付くことをあらかじめ予想していた可能性が出て来る。そして逆に旧約をあまり読まないキリスト教徒に対しては、秘匿が有効である点も計算し

ていたかもしれない。そうだとするとホーフマンスタールはユダヤ人だけにそっと、自分の心の中にユダヤ教の原典の登場人物が住み着いていると教えたことになると言うのである。¹³

ハースは触れていないが、作品中アグルが語り手の心の中に存在するその在り方も、ハースの説を裏付けているように思える。

アグルなる男は私のからだのどこかにいる。そこには私がまだ三歳にもならない頃の体験も潜んでいる。記憶の中に一度も登場したことの無い体験だ。また私のもっとも暗い夢の秘密も、私が意識に隠れて考えたことも潜んでいる。そして死者が墓から蘇ってくるように、それらはいずれ表に出してくるに違いない。¹⁴

アグルは旧約聖書に登場する人物であるから、ユダヤ人の祖先に当たる。このこととアグルが語り手の「記憶の中に一度も登場したことの無い」遠い昔の体験、「もっとも暗い夢の秘密」、「意識に隠れて」考えた思考などのそばに潜んでいることを考え合わせると、二代前にキリスト教に改宗したホーフマンスタールのユダヤ教への遙かな思いや、三代前まで流れていたユダヤの暗い血に対する意識下の自覚と重なり合ってくる。

語り手によれば、燕の往還が自覚の行動でないのと同じく、人間が道を歩いたり人と出会ったりするのも、自らの意志で行動しているわけではない。意識とは全く別の、運命のようなものによって操られたぐり寄せられていることになる。こうした吸引力をホーフマンスタールはエロスと呼ぶ。このエロスは抱擁よりも豊かで一族との時空を越えた交感、感応をも可能にしている。したがって昔から世界に散在するユダヤ人同士が時間や空間、生死を超越してお互いに感応し合う、一種の血の呼び合いのようなものと解釈することもできる。

こう考えれば、燕の往還の話とユダヤ人の祖先アグルが心の中に住むという一見無関係に見える二つの話が、このエッセイの中で同居していることにも納得がいく。アグルなる人物は語り手がかつて夢に見た流浪の民の長であるという結論も、この長が古代ユダヤの王のことだと考えればよい。つまり「道と出会い」はハースの言うとおりに、ホーフマンスタールが心の中にユダヤ人が住み着いていること、自分の意識しないところでユダヤ民族に引き寄せられていることなど、自らのユダヤ性をユダヤ同胞だけに告白したものと読めるのである。

ところでハースがこの論文をウィーン郊外のロダウンに住むホーフマンスタールに送ったところ、ホーフマンスタールからは実に冷たく厳しい反応が帰ってきた。¹⁵

自分がユダヤ人と関係があるのは父方の曾祖父を通してだけであること、それ以外にユダヤの血が入ってきたことは結婚相手の女性たちの係累からしても考えられないことなどを、まず具体的に論証している。そして、そのことはすでに公になっているにもかかわらずハースが事実を歪曲し、時流の尻馬に乗って軽率な論文を書いたことに大いに立腹している。¹⁶

無理もない。この論文は第一次大戦の敗戦でハーブスブルク帝国が崩壊した直後の1922年に発表されている。君主主義者のホーフマンスタールにとっては、身の振り方が難しい時期であった。そうでなくても「バラの騎士」や「イエーダーマン」の作者としての名声に陰りが生じ、戯曲作家としての転身も違和感を持たれていた時である。そこに突然ユダヤ性問題が降って湧いて来たのである。シュニッツラーの日記（1922年6月18日）を見ると、この論文のことがリヒテンシュタイン妃殿下の列席する貴族の社交界でも話題になっていたようだから¹⁷、ホーフマンスタールはかなり迷惑を蒙ったと思われる。

選りによってあなたがこんなことをしてくれたとは、とても残念です。今日、芸術家としての私の立場にはまことに微妙なものがあります。私の創作全体を難しい奇妙な自己主張と見なされかねません。

以前一度お目にかかったことがあります。その後はお手紙だけでしたが、私の仕事を（総体として、これが肝心です）厚意的に丁寧の評価してくださっていました。私の仕事全体は脈絡がないように見えますが、実は大変首尾一貫した有機的創造行為で、自分で解説を試みたいと思っていました（高揚した瞬間にはその鍵をもっているように思えたのです）。その際、あなたのことを協力してくださる方、勇気づけてくださる方と（とにかくわれわれ生身の人間は弱いですから）考えていました。ところが、全く逆でした。私を待ち受けていたのは人間の顔ではなく、「時代精神」の醜い仮面でした。不正確さと恣意性が残念です。¹⁸

続く手紙では、本を送るというハースの申し出を断り、すでに受け取っていた論文も送り返すと述べ、これ以上二人の関係がこれじれないように、交際を中止して数年間の冷却期間を置くことを提案している。そして次のように付け

加えている。

まことに頭脳明晰で、熱意も尋常でなく、出世欲も満々です。でもあなたにはいちばん貴重なものが欠けています。本来的なものが欠けています。衷心より申し上げるのですが、凡人でないという功名心をお捨てになり、あなたの才能を迎えてくれるまともな市民的職業に邁進された方がよいのではないかと考えています。¹⁹

文学者としての成功を目ざす年下の友人にとっては止めの一撃である。ただホーフマンスタールは激昂していたにも拘わらず、「不正確さと恣意性 (das Ungenaue und Willkürliche)」をなじるだけで、一言も間違っているとは言っていない点は留意しておくべきであろう。

(4)

ホーフマンスタールの作品には「道と出会い」のような、時空を超えての先祖との交感を扱ったものがいくつかある。そしてそれらは、もともと唯美的なホーフマンスタール文学の中でも、もっとも美しい部分を形成している。その代表的なものに、「もとより中には…」(1895?)がある。

もとより中には、下層で死なねばならぬ者もいる
船の重い櫂が水をかすめて過ぎる所で
他のひとびとは 上部の舵のほとりにたむろし
飛ぶ鳥や星の国を眺めて占う術を知っている

いつも重い手足を もつれ乱れた
人生の根かたに投げだす者もいる
他のひとびとのためには 巫女や女王の
かたえに席がしつらえられ
そこでは彼らは 頭も双手もかるやかに
さながらわが家のように くつろいで腰をおろしている

しかし一つの影が かなたの生から

今ひとつの生に落ちかかり
かるやかな者らは 重い者らに
空気や土のように 結びついている

遠く忘れ去られた民族らの疲れを
わたしは臉から拭いとることができない
はるかの星が音もなく落ちる その光を
愕いた心に映さずにおくこともできない

おびたしい運命が わが運命のほとりではたらき
存在の手にかなでられ すべては入り乱れたしらべを歌う
そして その中でわたしのかわりは この人生の
かほそい焔やひびきかすかな琴よりも 甲斐あるものなのだ
(川村二郎訳)²⁰

はじめの二つの節は海の世界と陸の世界とを例に取りながら、人間の運命は人によって大きく異なっていることを伝えている。「千夜一夜物語」のようなロマン的雰囲気漂っていて、船縁に当たる夜の海の波音が耳元に聞こえてくるようである。第三節では、それら個々の生を結び合わせる、なにか大きな影のようなものの存在が示される。次の第四節は有名で随所に引用されているが、その美しさはロマン的と言うよりは魔術的である。語り手は「遠く忘れさられた民族らの疲れ」を自分の臉から拭い去ることができないと言う。この感覚は、その後続く流星との一体感やさまざまな運命との結びつきからも分かるように、「道と出会い」に描かれたエロスによって引きつけ合う一体感覚と同じものである。三節でいう影とは、言ってみれば「道と出会い」のアグルの機能を持ったものである。

明らかにここでもテーマは時空を超えた人間同士の交感である。「遠く忘れさられた民族ら」とは、ヒルデ・シュピールも言うように、地上最古の民族、つまりユダヤ教の言うユダヤ族のことを指しているのであろう。²¹すると「民族らの疲れ」がディアスポラによる流浪のことではないかという推測も生まれてくる。あながち的外れではあるまい。語り手はディアスポラの疲れを自分の臉に感じている。

もし以上の解釈が妥当であるとする、この「もとより中には…」の詩も、

エッセイ「道と出会い」の場合と同じく、ユダヤの民との一体感をうたったものと読むことができるのである。

この詩にうたわれている宇宙的交感の圧倒的な美しさを、ユダヤ民族だけのものに限定することは、詩の魅力を損なう恐れがあることは十分理解している。「先祖の経帷子が自分の髪の毛のように身近に感じられる」とうたった「無常について」(1894)のように、ホーフマンスタールには先祖との一体感を詠いながらユダヤ性との関連が見えてこない詩もある。ホーフマンスタールの使う民族とか先祖、歴史と言う言葉は多くの場合、土俗性・土着性がなく、透明な抽象性に貫かれていると言うことも気になる。

また先祖の霊との交感は何もユダヤの民に特有の感性ではないことも疑う余地がない。折口信夫の「死者の書」を挙げるまでもなく、霊呼びの習わしなら我が国にもある。そもそも信仰というものは、死者の霊との交感から始まると言っても過言ではない。

しかしながらその一方で、この種の一体感は、ユダヤ民族の場合、他の民族より緊密なのではないかという思いもまた強いのである。

(5)

先祖との一体感がホーフマンスタール個人のものなのか、ユダヤ人に共通するものなのか、あるいはウィーン文学に特有なのかはよく分からない。ただ、ホーフマンスタールの年長の友人だったユダヤ系のリヒャルト・ベア＝ホーフマン(1866-1945)にも極めて似た感覚の詩がある。人口に膾炙した「ミリヤムへの子守唄」(1919)である。子守唄の形を取っているが単なる子守唄ではない。父親がユダヤ人として生まれた娘に語って聞かせる、ユダヤ人としての悲痛な心構えである。なお、ミリヤムと言う名はユダヤ人が好んで娘に付ける名前前で、キリスト教徒のマリアに当たる。

ミリヤムへの子守唄²²

お眠り わたしの子 お眠り 夜が来る
 ごらん 陽が沈む
 陽は山の向こうで赤く染まって死ぬ
 きみは きみは太陽も死も知らない

光と輝きを見ておいで
 お眠り きみにはまだたくさん太陽がある
 お眠り わたしの子 わたしの子 お眠り

お眠り わたしの子 風がそよぐ
 風の道が分からないように
 この世の道も暗くて見えない
 見えない きみにも わたしにも わたしたちみんなにも
 見えないまま 歩むのだよ みんな一人で
 だれも連れ添ってあげられない
 お眠り わたしの子 わたしの子 お眠り

(. . .)

眠っているかい ミリヤム ミリヤム わたしの子
 わたしたちは流れの器 器の底深く
 亡き者の血が 生まれ出ずる者に流れる
 父祖の血が 不安と矜持の血が流れる
 わたしたちの中にみんながいる 寂しいものか
 きみはみんなの命 みんなの命はきみの中
 ミリヤム わたしの命 わたしの子 お眠り

第一節三行目の「陽は山の向こうで赤く染まって死ぬ (Hinter den Bergen stirbt sie (=die Sonne) im Rot)」は、落日の燃える太陽を見て血に染まって死んでいった一族の荘厳な不幸に思いを馳せるところである。落日をすらすら日々の太陽の死と思うほど、死が日常性を持っているのである。

第二節四行目の、この世の道が暗くて「見えない きみにも わたしにも わたしたちみんなにも」と言う嘆きの「きみ」、「わたしたち」、「わたしたちみんな」はいずれもユダヤ人のことであろう。ユダヤ人に生まれた以上、「きみ」もまた暗い道を一人で歩まなければならないと娘に言って聞かせているのである。

しかし絶望しているわけではない。最後の節にあるように、一族としての誇りと希望はしっかりと持っている。自分たちの体の中には父祖の血が子孫に向

かって流れているという。すべてのユダヤ人の命が自分の中にあり、自分もまたすべてのユダヤ人の命の中に入っていけると言うのである。「わたしたちの中にはみんながいる」, 「きみはみんなの命, みんなの命はきみの中」と詠われる感覚は3章, 4章で述べたホーフマンスタールの持つ先祖との一体感と同じものであると言ってよいだろう。

以上からホーフマンスタールの持っていた宇宙の一体感とユダヤ人の持つ先祖との一体感が似ているということは少なくとも言い得るのではないかと思う。

¹ Jens Rieckmann: Zwischen Bewußtsein und Verdrängung. Hofmannsthals jüdisches Erbe. In: DVjs 67 (1993) Heft 3. S.480.

² a.a.O. S.479.

³ Hugo von Hofmannsthal/Arthur Schnitzler: Briefwechsel. Frankfurt a.M.1964. S.178 (13.11.1903)

⁴ ホーフマンスタールのユダヤ性に焦点を絞って論じたものは注1のRieckmannnのものを除けば,

Ernst Simon: Agur, fils d'Jake. Hugo von Hofmannsthals jüdische Legende. In: E.E.Urbach (Hrsg.): Studies in Mysticism and Religion. Jerusalem 1967. S.235-260.

John Milfulls: Juden, Österreicher und andere Deutsche. Anmerkungen zum Identitätsproblem am Beispiel der Prosa Hofmannsthals 1912-1916. In: Geschichte und Gesellschaft 7 (1981). S.582-589.

Abigall Gillmann: Hofmannsthal's Jewish Pantomime. In: DVjs 71 (1997). Heft 3.1997. S.437-460.

ぐらいである。

⁵ Nike Wagner: Incognito ergo sum. Zur jüdischen Frage bei Karl Kraus. In: Literatur und Kritik. Heft 219/220.1987. S.387.

⁶ W.M.ジョンストン(井上修一ほか訳):「ウィーン精神1」, 1986年 みすず書房 100頁。

⁷ Arthur Schnitzler: Jugend in Wien. Eine Autobiographie. Wien. 1968. S.328.

⁸ Jens Rieckmann: S.472.

⁹ Jens Rieckmann: S.472.

¹⁰ Willy Haas: Hugo von Hofmannsthal. In: Gustav Krojanker (Hrsg.): Juden in der deutschen Literatur. Berlin (Welt) 1922. S.139-164.

¹¹ Hugo von Hofmannsthal: Die Wege und die Begegnungen. In: Gesammelte Werke. Prosa II. Frankfurt a. M. 1959. S.264-269.

¹² a. a. O. : S.264.

¹³ Willy Haas: S.145.

¹⁴ Hugo von Hofmannsthal: S.264.

- ¹⁵ Hugo von Hofmannsthal/Willy Haas : Ein Briefwechsel. Propyläen Verlag, Berlin. 1967, S.47.
- ¹⁶ Hugo von Hofmannsthal/Willy Haas : S.47.
- ¹⁷ Arthur Schnitzler : Tagebücher 1920-1922. Wien. 1993. S. 319.
- ¹⁸ Hugo von Hofmannsthal /Willy Haas : S.47.
- ¹⁹ a. a. O. S.48.
- ²⁰ 「ホーフマンスタール選集1」 河出書房 1974年 16頁。
- ²¹ Hilde Spiel : Glanz und Untergang. Wien 1866-1938. 2.Erg.Aufl. 1988. S.81.
- ²² Richard Beer=Hofmann : Das Schlaflied für Mirjam.